

ワークプレイスにおける教授・学習方略に関する検討 —派遣事業経験の内観記録をデータとして—

大内里紗 (東京学芸大学大学院連合)

キーワード：教授・学習方略，学習環境デザイン，当事者研究

問題と目的

福島 (2010) はワークプレイスにおける徒弟制による学習と学校システムによる学習を比較し、その差について言及している。徒弟制による学習とは、現場で行われている仕事をマスターすることであり、労働と学習は不可分の一体である。一方で、学校システムによる学習は社会的に機能分化しているために学校内で自律的に実践されていると説明している。2つの教授・学習方略には機能的な差があるため、徒弟制モデルと学校システムの接合には困難が生じることが指摘されている。

現在、徒弟制と学校システムを比較し、それらの接合を図るために実践場面における学習を客観的に分析した研究は数多くある。しかし、実践の当事者として内側からその学習を検討した例は少ない。そこで、本研究では実践に参加した当事者が自ら収集した内観データをもとに実践現場での学習について検討し、徒弟制モデルと学校システムの接合の一助とすることを目的とする。

方法

本研究では、実践場면을当事者として記述するために有元 (2016) の「他人の行為中の省察」を参考にした。進行中の実践に伴う他者の行為に対する自身の違和感を記述することで、自己省察を行い無意識の意識化を目指した。今回は筆者自ら人材派遣会社が提供する労働者派遣事業の業務に従事した。勤務中は逐一フィールドノートを作成することができないため、休憩時間及び業務終了後当日のうちに業務従事の際の内観を記したレポートを作成した。レポートは時系列に沿って業務内容と業務中の出来事、及び筆者の心情や考察を記述した。従事した派遣事業については Table 1 の通りである。

Table 1 派遣事業の詳細

日時	2018年12月1日 (9:00~17:00)
就業場所	関東圏内のサプリメント工場
業務内容	サプリメントの入った小箱の仕分け・箱詰め作業及び発送準備
業務従事者	社員(A,B,C), ベテラン契約派遣(D,E), 短期派遣(F,筆者)

結果と考察

レポートの記述を時系列に沿って「業務に関する内容」「筆者の内観」「他者とのやりとり」の3つに分類した。その後、「筆者の内観」の流れを軸に筆者の違和感と自己省察に関する記述を抽出し、考察を行った。なお、記述の抽出は心理学を専門とする大学教員1名と同大学院生2名及び筆者の協議によって行った。

1業務内容とその教え方に関する記述

筆者はレポートの中で度々、事前の説明不足や業務内容の教え方に対する不満を記述している (Table 2 参照)。また、業務終了後にそれらに関する考察を行っている (Figure 1 参照)。

Table 2. 筆者の不満に関する記述

業務に関して	筆者の心情・考察	他者とのやりとり
社員 B に黒い軍手を借りる。	その日の準備物には軍手の記載はない。準じゃあまず段ボール備物があるなら事前に通達しておくべきではないか。	B「ああ派遣さんが軍手持ってる？」 作ってもらうから！ 軍手持ってる？」 筆者「持っています。」

段ボール箱への小箱の詰め方を社員 A がやってみせる。

1つの段ボールに出来ただけたくさんの小箱が入るようにした。1つだけ大きくなるから。とりま箱に入るようにした。いらしいが、教え方がやつはこれで。簡素すぎる。

午前中より午後の方が流れてくる小箱も、サイズもバラバラになるので忙しい。

最初の小箱以降、段ボール箱への詰め方に具体的な指示はほぼ無し。隣にいた。自分の手が空社員 C の詰め方を見た時に F を援助する確認する。

作業自体は簡単だが、事前の説明や教育が足りなすぎる。説明の必要はないと判断される文化圏なのか。作業の説明を求める文化にいないのか。

Figure 1. 説明不足・教え方に対する不満への考察

このことから、筆者は事前に説明や教授を受けられることを期待していたにも関わらず、それが無かった事に対し不満や違和感を覚えていると考えられる。また、自身の期待と異なる状況は教授スタイルの文化的な差異によって生み出されていると考えていることが推察される。

総合考察

結果と考察より、筆者と工場労働者間では学習方略が異なっていた可能性が示唆される。工場労働者の学習方略が実践の中で行為によって学んでいく徒弟制的な「行為による学習 (learning by doing)」であったとするならば、筆者の学習方略は自身の学びを他者に教えることを前提とする学校システム的な「教授による学習 (learning by teaching)」であったと考えられる。

福島 (2010) は学校を徒弟制モデルの論理で説明する場合、中核的实践に当たる部分が決定不可能な未来にしか存在しない「空洞の共同体」であると述べている。学校システム内で扱われる教授・学習方略が実践現場で扱われるものと異なっているからこそ、学校教育と日常的な実践の接続を意識した学習環境のデザインが行われるべきである。